



荒

れ模様が続いてしばらく閉じこもっていたが、たまたま一日だけ朝から晴れたので、一週間ぶりのジョギングをした。大分間が空いたので、どの程度走ったものか体に尋ねながら慣れたコースを行くのだが、途中ふと思いついて堀川沿いを曲がり松江城に向かった。なだらかな坂を上りきったところに城山稲荷神社がある。ここも久しく立ち寄っていないので、ついでに参拝していくことにした。森の中にあつて、日中であつても薄暗く陰気なところなので、夜明け前の薄明のもとではとどころどころ雪を残した石段がうつすら浮かぶばかりである。

改修されたようで、あちこち以前と印象の違う箇所に出くわした。きれいになったぶん薄気味悪さは減じ、通りがかる人もいない早朝にたった一人で参るにはありがたかつたが、少々残念でもあつた。朽ちるに任せた風情の中でリラックスして見えたお狐様たちもいささか窮屈に見える。

このお稲荷さんは、かつて小泉八雲が足繁く通つたことで名高い。特にお気に入りのお狐様があつたというようなことを説明した看板も立てられている。八雲の愛でたその二体は、新設の覆屋に鎮座ましましていた。以前は、他のお狐様と同様雨ざらしだったので、どれが八雲のご執心にあずかつたものか想

像しながら一体一体眺めていた。今より面倒なおもしろかつたのだが、八雲が好きだと書いてくれたおかげで風化を免れた。

縁起によれば、藩主の夢に稲荷神が現れ、火事から守るから自分を祀れと言つたことに始まるという。松江の領民たちは、このお札を火除けに貼つたというから、庶民の防災意識を高めるのに多大な貢献をしたことになる。やはり領主である。出勤できずに焦るばかりの下賤の夢とは違う。

一月の奥出雲は根雪に覆われていて、田畑も山も境をなくす。夜遅くまで知人宅でご馳走になり、雪を踏みながら歩いて帰つたときのこと。峠を越えると視界がすつと広がつた。谷の真ん中、街灯が煌々と照るものの、ほの白く浮かぶ雪ばかり。その最も明るい真下で何か勢いよく動いている。全ての音を雪に吸われて静まりかえる中、見るとそれは、一匹の狐だつた。跳ねたりくねらせたり、四つ足を互い違いに踏んだり。金色の光をまき散らすように舞い踊つたのである。ぼくはしばらく身動きすることもなからず、体が冷えるのも忘れて見とれてた。

あれは、狐の祭りだつたのか、手袋を買つてはしゃいでいたか、それとも酔つた頭が映した幻影だつたのか。もしかしてここどこかにいる？あのとときの狐。

木幡智恵美

ショートステイ (3)

「婆さん、家に帰るつて騒ぐんじやないかな」夫が何度も口にする。不安な気持ちのまま、その日はやつてきた。放射線治療を終えて退院し、ショートステイに移る日だ。

午前中は、入院前までお世話になつていたデイサービスにあいきつに行つたり、レンタル品の引き渡しをしたり、バタバタした。昼食後、夫と二人で病院に向かう。

「痛いーす」詰め所を過ぎたところから、義母の声が聞こえてきた。病室に入ると、普段着に替えた状態で横になり、「痛いーす」と語調を変えて声を発している。「どこが痛いですか」と聞いても答えず、しばらくするとまた、「痛い、でーす」と、節をつけて唱えている。義母が唱えている間、私は荷物の整理にかかつた。着替え、タオル、紙オムツ、パッド、洗面用具などを袋に詰めて、そのままショートステイに持ち込むことになる。

退院手続きを終えて来た夫と交代。病室には一人しか入れないのだ。介護タクシーの迎えが来たとの連絡が入り、車椅子に乗せた義母と詰め所にあいきつをして病院玄関に向かつた。介護タクシーを使うのは初めてだ。運転手さんは、義母をタクシーの車椅子に移動させると、荷台に固定し、電動で車椅子ごと引き上げた。義母はなされるままにしている。夫は自分の車、私が義母と介護タクシーに乗つてショートステイへ向かつた。

ショートステイに着くと、ショートステイでレンタルした車椅子へ。職員さんが義母を大部屋中央のテーブルまで運ばれた。テーブルの周りには、デイサービスの人や、ショートステイの人が数人椅子にかけている。おやつ時間のようで、職員さんがお茶を配つていた。義母はすぐに隣の人に、「お宅、何歳ですか」と尋ねる。「九十です」と聞くなり、「若いねえ」と言つて、皆を笑わせた。ほんの少し前までは、瀕死の重病人だつたのに、すっかり蘇っている。部屋に荷物を運んで整理した後、ケアマネさんと所長さんとあれこれ確認する。褥瘡の手当て用のガーゼ、テープその他、必要なものをこの後買つてきてほしいと言われた。

ときどきしながら義母に帰る旨を伝えようと近づくと、職員さんが、「そろそろベッドで横になりませんか」と義母に話しかけていた。すると、義母は、「何で横にならんといけん」。皆との会話を楽しんでる隙に、「じゃあ、帰るけん」と夫とその場を去つたのだつた。

30代フリーター やあ、ジイさん。芸能人、政治家、企業経営者らの謝罪のニュースが絶えないな。

年金生活者 衣食足りて礼節を知ると、他人にも礼節を求めるようになる。「謝罪しろ」という声も大きくなり、それにこたえなければ地位が揺らぐ階層の人たちが増えてくる。きょうあすの食べ物心配をしなくて済むようになった私たちの社会に当然起きることが起きている。

30代 みんなが道徳的になったわけでもなさそうだ。

年金 謝罪には効用がある。それは相手にだけでなく、自分自身にも及ぶ。最近それをまた実感した。去年暮れ、通院中のクリニックで受付の担当者に無礼な言葉を吐いたら、あとで苦しくなり、年が明けて相手に謝罪した。気持ちが一気に落ち着いた。

30代 ジイさん、何をやらかしたんだ。

年金 クリニックの受付で、「こんばんは」と声をかけても、黙ったまま顔を

年金 たいていの反復強迫（フラッシュバック）は時間がたてば消えるか弱まる。心的外傷（トラウマ）を治癒あるいは寛解させる作用が反復強迫にはある。繰り返し過去の経験を回想することによって、あるいは繰り返し未来の経験を想像することによって、自分の状態と自分の置かれた状況をいやおうなく思い知らされる。それはおのれを対象化すること、対象化によっておのれに距離を置くことを意味する。距離をおいたぶん痛みや不安は和らぎ、やがて消えていく。

謝罪することにしたときの私はちょうどその段階ににあったと思う。私は自分と自分の置かれた状況を「対象化」し、痛い経験に距離を置くことができた。

30代 で、どんなふうにもその「対象化」とやらをやったんだ。

年金 そのクリニックで診察を申し込むときは、受付のカウンターで診察券をトレイに入れ、自分の名前を置かれた用紙に書くだけでよく、スタッフと

を上げない担当のスタッフに我慢ならず、帰りぎわに「感じよくないよ」と文句を言った。ところが、相手はよく聞き取れないひと言を発しただけで、あとは黙ったままだった。

謝罪を期待していた私は不意打ちを食らい、その場面を痛みとともに繰り返し思い出すようになった。そして、次にクリニックに行ったらそのスタッフがどんな対応をするか不安になり、あれこれ想定しては、考えられる自分のいくつかの行動を繰り返し想像するのをやめられなくなった。つまり過去の経験を回想する「事後」の反復強迫（フラッシュバック）だけでなく、未来の経験を想像する「事前」の反復強迫（フラッシュバック）にも襲われた。

30代 期待は裏切られるものだろう。

年金 人は何かを期待するとき、それがはずれる可能性、裏切られる可能性を過少に見積もる。それが期待するということだ。予測との違いもそこにある。だから、期待はずれは不意打ちとなる。心の受けるダメージはそれだけ

言葉を交わす必要はない。スタッフはそれを前提に作業をしているから、患者に「こんばんは」と声をかけられても、仕事に集中していれば聞こえないことや応答できないこともあるだろう。

私はそれに思い至らず、スタッフに「感じよくないよ」と非難の言葉を浴びせた。向こうはいつもどおりにしていたのに、なぜとがめられなければならぬのだろうか、と思ったに違いな

深くなり、トラウマを形成する。

私がクリニックのスタッフに言ったのは「嫌味」ではなく「クレーム」のもりだった。「クレーム」なら社会のルールに従った行動として正当化され、振り返りにあう心配もあまりない。そんな無意識のずるさも働いていたと思う。そしてルールに従った謝罪を期待した。

その期待の元になっていたのは別の期待だった。「こんばんは」と声をかけたなら「こんばんは」と応じてくれるだろうという期待だ。

30代 それが両方ともはずれた。

年金 自分の一連の気分と行動を振り返ると、私は自分の期待をかなえるために、「自己中」なことをずっと続けていたことに気づく。相手にとつては思わぬ災難だったに違いない。そんな私の心の無理が私自身を苦しめることになった。謝罪することにしたのはそれから逃れたいという気持ちからだった。

30代 ジイさんにしては殊勝な態度だ。

い。だから、どう応答していいかわからず絶句するしかなかった。

以上のようなことを考えているうちに、「感じよくない」のは私のほうだったと思いはじめた。そして次にクリニックに行つたとき「大変無礼なことを言つて、申しわけなかったです」と頭を下げた。

30代 自分が楽になりたいだけなら、とよく言われるとおりのことをやっただけだ。

年金 「政府の行為によつて再び戦争の惨禍が起ることのないやうにすることを決意」と宣言した日本国憲法の前文は、戦争を引き起こしたことを世界に向かつて謝罪するメッセージとして読むことができる。敗戦で心のよどころを失った当時の日本国民をそれがどれだけ落ち着かせたことか。

憲法9条の非戦・非武装の理念はこうして戦後の国民のアイデンティティーとなった。そんな条項の改変を国民投票にかけたとき、拒絶反応が起きるのは避けられないように思える。

ニュース日記 816
中村 礼治

謝罪の効用